古文家と揚雄

川合康三

唐宋の古文家がみずからを位置づけた系譜のなかに、揚雄（前五三―後一八）が組み込まれていることは、よく知られている。その位置づけの重みにはそれぞれの古文家の間でいくらか違いがあるにしても、彼らが主張する「道」の傳達者の一人として、ひとしなみに揚雄を重視したことは確かである。一方、揚雄は古文家が格別に重要な存在とみなした以前から、廣く文人の間に文學者の一つの典型として意識された先達でもあった。このように浸透していた揚雄像も、周知のとおり、朱熹の「莽の大夫揚雄卒す」（『通鑑綱目』）の一言が端的に示すように、南宋に至ってそこまでの長い文學史上の地位を失うに至る。揚雄はそれぞれの時代や文人によってどのように受け止められてきたのか、時間とともに移り變わるありさまをたどりながら、そこにそれぞれの時代、文人の文學に對する態度、見方がどのように反映されているのか、そうした問題を古文家にとって揚雄がもった意味を中心としながら考えてみたい。

一　唐以前の揚雄

後漢から魏晉南北朝の時期において、揚雄はまず漢賦の作者として司馬相如と竝び稱される存在であった。「義は楊雄よりも正しく、事は相如よりも實なり」（班固「東都賦」、『文選』巻一）、「相如は上林の觀を壯にし、楊雄は羽獵の辭を騁す」（張衡「東都賦」、同巻三）など、京都の賦のなかに揚雄の名は司馬相如とともにたびたび擧げられている。なかにはそこに王褒も加わったり（陳琳「爲曹洪與魏文帝書」、同巻四一）、さらに嚴君平も入れて四者を竝べる（左思「蜀都賦」、同巻四）こともあるが、司馬相如と揚雄の二人がまず擧げられるべき辭賦作家であったことに變わりはない。

それとは別に、世に埋もれた不遇の士、不遇のなかで獨自の思索を續けた人として揚雄を描くものもある。孤高の思索者としての揚雄像が生み出されたのは、何よりもまず揚雄自身に「解嘲」の作があるからである。それはすぐれた能力を備え、めでたき御代に生まれたかぎりは世におおいに用いられるべきなのに、なぜこのような微官に甘んじているのかという「嘲」りに對して、揚雄が辯「解」したものであるが、そのなかには世間に認められないままに「惟れ寂惟れ寞として（『漢書』巻八七下、揚雄傳。『文選』巻四五「解嘲」では「寞」を「漠」に作る）、德の宅を守る」生き方が描き出されている。さらに『漢書』揚雄傳の記述にも寂しい晩年の姿が描かれている。揚雄傳の「贊曰」より後の記述、つまり揚雄の「自序」でないことが明白な箇所に、侯

芭という名の門弟一人だけが起居をともにし、卒すると「侯芭爲に墳を起こし、之を喪すること三年」という。『七略』（『文選』巻五九、任昉「劉先生夫人墓誌」李善注引）に、「揚雄卒し、弟子侯芭　土を負いて墳を作り、號して玄冢と曰う」というのも、「寂寞」たる生き方に連續する死後の寂しさを語っている。

このような揚雄の孤高の姿に惠まれない自分のありさまを重ね合わせ、それによって士大夫としてのアイデンティティーを確保し、且つ失意の自分を慰めようとする作として、たとえば西晉・左思の「詠史」詩八首之四（『文選』巻二一）がある。そこでは前半八句に現世の榮華を極める繁華な世間を描き、後半四句ではそれに背を向けて孤獨と寂寞のなかに沈潛する揚雄を唱う。揚雄は名利追求に明け暮れる世俗の生き方に對峙する孤高の人として形象化され、そうした揚雄像が士大夫のなかに受け繼がれ、精神世界の價値に生きる士人の典型とされてきたのである。宋・鮑照の「詠史」詩（『文選』同巻）では揚雄ではなく、「獨り寂漠」たる存在として嚴君平が世間の榮華に對置されるが、それも同じ構造といってよい。ちなみにこの系譜はその後も京都の詩として受け繼がれ、唐・太宗「帝京篇」、駱賓王「上吏部侍郎帝京篇」、盧照鄰「長安古意」などに續いていくが、相い反する二つの價値が、左思の詩ではそれぞれ四句ずつに割り振られていたのが、鮑照の詩では前半の十四句に對して後半は二句にすぎないように、しだいに京都の繁榮を敍述するのに傾いていき、不遇孤高の姿は形骸のみになっていく。これは枚乘の「七發」が世間の快樂のむなしさを說くのを主旨としながら實際には快樂の敍述が中心であるように、或いはまた揚雄らの漢賦もたとえば獵を諫めるといった意圖をもちながら、獵のすばらしさの敍述が正面に出ているように、儒家的な文學理念を保ちつつ文藝としての魅力を發揮しようとする中國古典文學の性格による。

漢賦の代表的な作者、或いはまた孤高の思索者としての揚雄とは別に、揚雄が王莽政權に與したことに關しては、顏之推『顏氏家訓』文章篇のなかの、文人の實態は道德に乖離していることを列擧したなかに、「揚雄　德は美新に敗る」と記され、さらに文學に意義あることを說くくだりでも、揚雄については「劇秦美新を著わし、妄りに閣より投ず。周章怖慴し、天命に達せず、童子の爲のみ」、そして後世必ず理解されるといわれた『太玄』は現在でも無用の書であり、醬油がめの蓋にもならないと否定を重ねる。生前の數少ない理解者の一人であった劉歆が揚雄に對して、祿利に目もくれずに著述に努めたところで「吾れは後人用って醬瓿を覆うを恐る」と語ったことばを借りて、『太玄』を否定するのである。

顏之推のように揚雄を斷罪する見方がないではなかったにしても、一般には揚雄は必ずしも否定的な評價を受けていたわけではなかった。劉勰『文心雕龍』麗辭篇では對偶の文采の最初に位置するものとして前漢の揚雄・司馬相如、後漢の張衡・蔡邕を擧げて、「揚・馬・張・蔡の、麗辭を崇盛して自り、宋の晝・吳の冶の如く、形を刻り法を鏤み、麗句は深采と竝び流れ、偶意は逸韻と俱に發す」というように、漢賦の表現手法を驅使した代表として司馬相如と竝べているのである。しかし後に古文家が「道」の傳達者として揚雄を重視したような捉え方は、この時期にはまだ見られない。

二　唐代における揚雄

唐の初めには六朝期の正史が續々と編纂され、その文學傳にはそこに至るまでの文學の流れが略述されているが、前漢を代表する文學者

として『周書』「王褒・庾信傳」論では「二馬・王・楊」（司馬遷・司馬相如・王褒・揚雄）、『北齊書』「文苑傳」序では「卿・雲」（司馬相如・揚雄）という竝稱のなかに揚雄の名が擧げられている。しかし『晉書』「文苑傳」では「賈・馬」（賈誼・司馬相如）のみであって、揚雄の名はない。初唐四傑にも文學史的な記述がしばしばあるが、漢代の文學者としては、盧照鄰「騎馬都尉喬君集序」（『盧照鄰集箋注』卷六）[1]では司馬相如一人を擧げ、「南陽公集序」（同卷）では賈誼・司馬相如、「樂府雜詩序」（同卷）では李陵の名が記されている。楊炯「王勃集序」（『楊炯集』卷三）[2]では賈誼・司馬相如、王勃「上吏部裴侍郎啓」（『王子安集』卷八）[3]では枚乘・司馬相如、駱賓王「和道士閨情詩啓」（『駱臨海集箋注』卷七）[4]では李陵・班婕妤、といったぐあいで、揚雄は擧げられていない。初唐の時期、漢代の文學者としてまず想起されたのは賈誼・司馬相如の方であって、揚雄は必ずしも眞っ先に取り上げられる存在ではなかったようだ。

文學作品のなかにあらわれる揚雄の姿も、それ以前と大きな變化はないといっていい。漢賦の作者としての面、世に埋もれた著述者としての面、その雙方が杜甫の詩にも見える。「奉贈韋左丞丈二十二韻」（詳注卷一）では「甫　昔し少年の日」を回想して、

賦料揚雄敵　賦は料る　揚雄の敵かと
詩看子建親　詩は看る　子建の親なるかと

文學についての自負を、賦と詩それぞれのジャンルにおける第一人者である揚雄・曹植に比擬して述べる。

成都にしばしの落ち着きを得て浣花草堂を編んだ時の詩「堂成」（詳注卷九）には、

旁人錯比揚雄宅　旁人　錯まって揚雄の宅に比すも
懶惰無心作解嘲　懶惰にして心の解嘲を作る無し

郊外にひっそりと居を營む讀書人を周圍の人々が揚雄になぞらえたのに對して、無位の身を辯明しようとする氣持ちはないというのである。

唐代の文學作品のなかでの形象はおおむねこのようなものであって、聖人に次ぐと稱えたり、王莽政權に關與したと非難したりすることは見えない。李白の「感寓」二首之二（詹鍈主編『李白全集校注彙釋集評』卷二）[5]は先に擧げた左思「詠史」詩に連なる作で、前半に繁華に遊ぶ若者を唱い、末六句に揚雄が唱われる。

子雲不曉事　子雲　事を曉らず
晚獻長楊詞　晚に長楊詞を獻ず
賦達身已老　賦達するも身已に老い
草玄鬢若絲　玄を草して鬢　絲の若し
投閣良可歎　投閣　良に歎ずべし
但爲此輩嗤　但だ此の輩の嗤うところと爲る

揚雄投閣の事が用いられているが、それは現世の快樂に醉いしれる少年と對比して拙い生き方をいうもので、「子雲を以て自ら況う」（唐汝詢『唐詩歸』）という解釋もあるように、非難するどころか、そういう身を憐れんでいるのである。杜甫が鄭虔と自分の哀れな身を自嘲氣味に唱った「醉時歌」（詳注卷三）のなかで、

相如逸才親滌器　相如は逸才あるも親ずから器を滌い
子雲識字終投閣　子雲は字を識るも終に閣より投ず

というのも、知識人の慘めな境遇を漢賦の二大作者に借りて言ったものだ。李白・杜甫の詩に見られるように、一般に唐代の文學のなかでは揚雄への非難もないが、道統を繼ぐ一人としての重視もされていない。

三　古文家における揚雄

1　韓愈以前の古文家における揚雄

唐代における古文の主張は、今日ふつうに理解されるところでは、初唐末期の陳子昂に發し、盛唐前半の李華、蕭穎士、賈至、元結、獨孤及、そして盛唐後半の柳冕、梁肅、權德輿らによって引き繼がれ、續く中唐の韓愈、柳宗元、及びその周圍の李翺、皇甫湜らによって大いに唱えられた、とされている。ところが揚雄についての言及を見ると、韓愈以前の盛唐古文家の言論のなかには、韓愈以後のように特別な重みをもった位置づけは見られない。

李華（七一五？―七七四？）は崔沔の文集（佚）の序、「贈禮部尚書孝公崔沔集序」（四庫全書珍本三集『李遐叔文集』卷一）のなかで、「有德の文」の系譜を記している。

夫子の文章は、偃・商　焉（これ）を傳う。偃・商歿して孔伋・孟軻作（おこ）る。蓋し六經の遺なり。屈平・宋玉は哀しみて傷い、靡して返らず。六經の道は遯せり。

孔子から子游・子夏、そして子思・孟軻と傳えられたのが、屈原・宋玉に至って墮落したと說く。屈原の登場を契機として正しい文學は衰退に傾いたとする考えはそれ以前から語られてきたものである。

漢以後の文學の展開を述べている文は李華にはないが、蕭穎士（七一七―七六八）の意見として記しているところに、李華自身の見解も反映しているとみなしてよい。

君謂えらく六經の後に、屈原・宋玉有り。文甚だ雄壯なるも、經たること能わず。厥の後に賈誼有り、文詞最も正しく、理體に近し。枚乘・司馬相如も亦た瓌麗の才子、然れども風雅に近からず。揚雄は意を用いること頗る深し。班彪は理を識り、張衡は宏曠たり、曹植は豐贍たり、王粲は超逸たり、嵇康は標舉、此の外皆な金相玉質にして、尙ぶ所或いは殊なり、備さに舉ぐる能わず、と。（「揚州功曹蕭穎士文集序」、同卷）

ここでは前漢から賈誼と司馬相如を舉げ、後漢・魏晉の文人をまとめた所に揚雄が舉げられているが、特徵を備えた文學者の一人として把握されているに過ぎない。

賈至（七一八―七七二）は漢代の文人として揚雄と司馬相如の二人を上げる。

是に於て仲尼は詩を刪し易を述べ春秋を作り、帝王の書を敍す。三代の文章、炳然として觀るべし。騷人の怨靡、揚・馬の詭麗、班・張・崔・蔡、曹・王・潘・陸、波を揚げ颷を扇るに洎び、大いに風雅を變ず。宋齊梁陳は、盪して返らず。（「工部侍郎李公集序」、『全唐文』卷三六八）

獨孤及（七二五―七七七）の文學史觀は、梁肅が記している。

後世　作者有りと雖も、六籍は其れ及ぶべからず。荀・孟は樸にして文少なし。屈・宋は華にして根無し。以て正を取る有らば、其れ賈生・史遷・班孟堅のみ。（「常州刺史獨孤及集後序」、『全唐文』卷五一八）

內容に偏る荀子・孟子、表現に偏る屈原・宋玉、兩者の兼ね合いを得た者として漢の賈誼・司馬遷・班固を舉げるのみで、揚雄にはまるで言及していない。

次の世代の古文家、梁肅（七五三―七九三）はより雄辯に漢代の文學について語っている。

三代の後、其の流派別し、炎漢の制度は霸・王の道を以て之に雜（まじ）う。故に其の文も亦た二あり。賈生・馬遷・劉向・班固は、其の文博厚た

り、王風より出づる者なり。枚叔・相如・揚雄・張衡は、其の文雄富たり、覇塗より出づる者なり。（「補闕李君前集序」、『全唐文』巻五一八）

梁肅によれば、漢代の政權に王道と覇道の二つの要素が混在していたことを反映して、漢代の文學にも二つの種類がある。王道に對應する者としては賈誼・司馬遷・劉向・班固、覇道に對應する者としては枚乘・司馬相如・揚雄・張衡。漢代の文學を二つに分けるこうした考えは、すでに指摘されているように、『隋書』巻四二、李德林傳に引かれる楊愔のことばにすでに見える。そこでは「經國の大體」である賈誼・晁錯、「雕蟲の小技」である司馬相如・揚雄、と分けるのだが、揚雄は司馬相如などとともに辭賦の作者として、傳達すべき内容よりも文采を驅使した文學者として把握されている。それはまた、梁肅よりも上の世代の古文家である崔祐甫（七二一―七八〇）にも見える。

文を以て邦を經せんと欲する者は宜しく董・賈なるべし。文を以て俗を動かさんと欲する者は宜しく揚・馬なるべし。言偃（子游）の文は、鬱として見えず。（「穆氏四子講藝記」、『全唐文』巻四〇九）

やはり漢代の文學を國家の經營に關わるもの（董仲舒・賈誼）と文學として歡迎されるもの（揚雄・司馬相如）とに分け、揚雄は後者に屬するとしている。

柳冕（？―八〇五？）の漢代文學論も司馬相如・揚雄の文學が教化に寄與しえないものであることを說いている。

屈宋より以降、文を爲る者は哀豔を本とし、恢誕に務め、比興を亡くし、古義を失せり。揚馬の形似、曹劉の骨氣、潘陸の藻麗と雖も、文多くして用寡し。則ち是れ一技にして、君子は爲さざるなり。昔し武帝　神仙を好み、相如は大人賦を爲りて以て諷す。帝之を覽て、飄然として凌雲の氣有り。故に揚雄は之を病みて曰く、諷は則ち諷なり。吾れは勸を免れざるを恐る、と。蓋し文に餘り有りて質足らざれば則ち流。才に餘り有りて雅足らざれば則ち蕩。流蕩にして返らず、人をして淫麗の心有らしむ。此れ文の病なり。雄は之を知ると雖も、之を行なう能わず。之を行なう者は惟だ荀・孟・賈生・董仲舒のみ。（「與徐給事論文書」、『全唐文』巻五二七）

屈原以來、文學は道から乖離する方向にゆがみ、正しい文學のあり方を實踐しえたのは、荀子・孟子・董仲舒のみであった、揚雄はそれを認識していたが、實作においてはその流れを是正することはできなかったと言う。

このように韓愈以前の古文家の間では、揚雄は漢代の文學者の一人ではあるが、それ以上の位置づけはされていない。さらに漢賦は屈原に始まる文學の文學化の方向にあり、それは道から乖離したものとして捉えられている。次に見る韓愈の揚雄に對する位置づけとは大いに異なっているのである。韓愈以前の古文家については、韓愈との連續性がこれまで探求されてきたが、兩者の間の相違も今後は考えられなければならないだろう。揚雄に對する捉え方の違いは、兩者を分かつ指標の一つであるにちがいない。

2　韓愈

漢代の代表的な文學者の一人に揚雄を數えるという、これまで十分に浸透していた捉え方は、韓愈にもそのまま見られる。「送孟東野序」（『韓昌黎文集校注』巻四）[8]のなかでは、歷代の「善く鳴る者」、すぐれた表現者を列擧しているが、「漢の時は、司馬遷・相如・揚雄、最も其の善く鳴る者なり」。司馬相如と竝列していることにも示されるように、ここでの揚雄はもっぱら文學者としての面が捉えられている。

それに先だって、先秦に關しては、「臧孫辰・孟軻・荀卿」の三人を「道を以て鳴る者」、「楊朱・墨翟」ら十四人を「其の術を以て鳴る」、すなわち儒家に屬する表現者と諸子に屬する表現者を區別して擧げているが、揚雄が「道」に寄與しているとはまるで言及されていない。「答劉正夫書」（同卷三）は文學はたとえ同時代に受け入れられなくても尋常なものと異なることによって後世に傳わりうることを述べるが、そこにも「漢朝の人、文を爲る能わざる莫きも、獨り司馬相如・太史公・劉向・揚雄、之が最爲り」。擧げられたなかに劉向が加えられているが、ここでも揚雄の表現者としての卓越を言う。この限りにおいては、韓愈における揚雄も、從前と大きな違いはなく、漢代の代表的な文學者として把握されている。

孤高の思索者としての揚雄像、それも韓愈の文中に見える。「與馮宿論文書」（同卷三）では、自分の文に對する自分自身の評價と世間が與える評價とがちょうど反比例の關係にあることから、「古文」を書くのは今の人に歡迎されるためではなく、眞の理解者が理解してくれることを期待するのみだということを述べ、その例證として揚雄が同時代の人から理解されなかったことを擧げている。そして門下の李翺と張籍が進士を目指しながらそれと相い反する「古文」を學ぶという困難な道を歩んでいることを「其の俗尙を棄てて寂寞の道に從い、之を以て名を時に爭うを閔む」と言う。「寂寞の道」とはもちろん揚雄の孤高の生き方を指している。

ところが、司馬遷・司馬相如・劉向らをさしおいて揚雄のみを取り上げ、しかも揚雄を道の系譜のなかに位置づける記述が韓愈にはある。「原道」（同卷一）には言う、

斯れ吾が謂う所の道なり。向に謂う所の老と佛の道に非ざるなり。堯は是を以て之を舜に傳え、舜は是を以て之を禹に傳え、禹は是を以て之を湯に傳え、湯は是を以て之を文・武・周公に傳え、文・武・周公は之を孔子に傳え、孔子は之を孟軻に傳う。軻の死するや、其の傳を得ず。荀と揚は、焉を擇びて精ならず、焉を語りて詳しからず。周公由り上は、上にして君爲り、故に其の事行なわる。周公由り下は、下にして臣爲り、故に其の說長し。

儒家の道の傳承を語るこの部分では、堯―舜―禹―湯王―文王・武王・周公という統治者における傳承、そして孔子―孟軻という、實踐を可能とする統治者でなく、言論によってそれを廣める役割を果たした人による傳承とに分け、さらに孟子以後はその傳承が部分的に選擇されたものに變化し、「不精」「不詳」になったとして荀子・揚雄の二人を擧げている。儒家の繼承者ではあるが、それ以前とは異質なものとされる。

道と一體になった文の繼承關係については、先に擧げた李華の「崔沔集序」にも、孔子→子游・子夏→子思・孟軻という系譜が記されていた。但し「文章」のそうした正統は屈原を境に斷絶するという文脈のなかでであった。韓愈の「道統」の考えが直接に基づくのは、『孟子』盡心篇下の敍述であろう。

孟子曰く、堯舜由り湯に至るまで、五百有餘歲。禹・皐陶の若きは、則ち見て之を知り、湯の若きは、則ち聞きて之を知る。湯由り文王に至るまで、五百有餘歲。伊尹・萊朱の若きは、則ち見て之を知り、文王の若きは、則ち聞きて之を知る。文王由り孔子に至るまで、五百有餘歲。太公望・散宜生の若きは、則ち見て之を知り、孔子の若きは、則ち聞きて之を知る。孔子由り而來、今に至るまで、百有餘歲。聖人の世を去ること、此の若く其れ未だ遠からざるなり。聖人の

居に近きこと、此の若く其れ甚だしきなり。然り而うして有ること無くんば、則ち亦た有ること無からん。

ここには自分こそその系譜に連なる者だという自負と使命感がこめられている。

韓愈はさらに「讀荀」（同巻一）においては、

始め吾れ孟軻の書を讀みて、然る後に孔子の道の尊く、聖人の道は行ない易く、王は王たり易く、覇は覇たり易きを知る。以爲えらく孔子の徒沒して、聖人を尊ぶ者は、孟氏のみ、と。晩れて揚雄の書を得、益ます孟氏を尊信す。雄の書に因りて孟氏は益ます尊ければ、則ち雄なる者は、亦た聖人の徒か。

ここでも揚雄を孔子の一門に繋がる存在として位置づけている。そして揚雄の功績は、孔子の直接の繼承者である孟子の意義を喧傳しえたことにあると認めている。繼承者を通すことによって先行者をよりよく理解できるというのである。

「重答張籍書」（同巻二）においては、

文王沒して自り、武王・周公・成・康相い與に之を守り、禮樂皆な在り。夫子に及ぶまで、未だ久しからざるなり。夫子自り孟子に及ぶまで、未だ久しからざるなり。孟子自り揚雄に及ぶまで、亦た未だ久しからざるなり。然るに猶お其の勤むること此の若くして、而る後に能く立つ所有り。……己れの道は乃ち夫子・孟軻・揚雄の傳うる所の道なり。

ここでは文王―武王・周公・成王・康王に續いて、孔子―孟子―揚雄という系譜を記している。揚雄は孔子、孟子に續く存在と高く掲げられているのである。

このように韓愈は繰り返し道の系譜を記し、そしてそのなかに揚雄を位置づけている。道統を唱えるのは、自分が孔子以來の系譜に連なる者であると述べることによって正統のなかに組み込み、己れの存在を意義づけようという意圖があったためだろう。韓愈の唱える古道はその時代においてはまだ中心から遠い場で少數者によって主張されていたに過ぎないのである。その道統のなかに揚雄を据えたのはなぜか。韓愈は揚雄のどこを評價しているのか、具體的な説明がないために定かにしがたいが、一つの推測を記せば、たとえば孟子の性善、荀子の性惡に對して、揚雄が善惡混淆するとした立場が、韓愈自身の性論を導くのに必要であったというような、思想上の要請があったのだろうか。これについては揚雄、韓愈の思想の全體を明らかにしたうえで再考しなければならない。今、確かなことは、それ以前の揚雄への言及がもっぱら揚雄の漢賦作者としての面を捉えてのことであるのに對して、韓愈が揚雄を標榜したのは、揚雄の「雕蟲篆刻」の面ではなく、『論語』に倣って『法言』を著わし、『周易』に倣って『太玄』を書いたという、思想家としての面に着目してのことである。

3　韓愈の周邊と韓愈以後の唐代古文家

韓愈が揚雄を道統のなかに据えた見方は、すぐさまその時代に浸透したわけではなかった。韓愈の周邊の人々においても、揚雄はそれまでと同じように漢代の文學者として捉えられているに過ぎない。たとえば裴度（七六五―八三九）は政治的立場としては韓愈が常に從った深い關係にあるが、韓愈の表現活動に對してはその極端な偏向を「寄李翰書」（『全唐文』巻五三八）のなかで批判している。そこに周公・孔子から漢代に至る文學のありさまを述べた箇所があり、荀子・孟軻は周公・孔子を補佐する文、騷人は發憤の文、司馬相如・揚雄は諷諫の

文、賈誼は化成の文、司馬遷は「財成」の文（歴史を裁量して作り上げた文章）、董仲舒・劉向は通儒の文、と分類している。「譎諫の文」というのは、司馬相如・揚雄の賦作者としての面を捉えたもので、賦に諫言の機能を認めてのことであるが、しかし續いて「別に一家を爲すも、是れ正氣にあらず」と言い、「化成」の賈誼、「通儒」の董仲舒・劉向とが儒家の正統に位置づけられるのとは一線を劃しているのであって、揚雄を道の正統に据えるものではない。

卓越した表現者ではなかった裴度の文學觀のなかに當時の一般的な見方をうかがうことができると考えてよいだろうが、すぐれた作者であり、またしばしば韓愈とともに古文運動の旗手と目される柳宗元にも、揚雄を偏重する記述は見られない。「柳宗直西漢文類序」（『柳宗元集』卷二一）[7]では前漢の文學者として賈誼・公孫弘・董仲舒・司馬相如の四人を擧げ、「與楊京兆憑書」（同卷三〇）では屈原・司馬遷・王褒・劉向を擧げるが、いずれも揚雄の名はない。「答韋中立論師道書」（同卷三四）では自分が依據する古典として經書に續いて、『穀梁傳』、孟子・荀子、莊子・老子、『國語』、『離騷』、太史公を擧げるが、漢代では司馬遷一人である。わずかに「與友人論爲文書」（同卷三一）のなかで古來著述は生前には認められないものであることを述べた個所に、「揚雄沒して『法言』大いに興り、馬遷生まれて『史記』未だ振るわず」と司馬遷と對にして揚雄が登場するのみで、續けて「彼の二才すら、且つ猶お是くの如し」と言うように、揚雄の才を認めないではないが、同時代から理解されない文學者として想起されているに過ぎず、韓愈のような重視は認められない。

韓愈の直接の門弟の一人で、その女婿であり、韓愈の文集を編んだ李漢は、「昌黎先生集序」のなかで、「文なる者は、貫道の器なり」と載道の文學觀を表明しているが、經書の精神がまだ生きていた「秦漢已前」の卓越した文學者として、「司馬遷・相如・董生（董仲舒）・揚雄・劉向」を擧げるが、ここでも漢代の代表的作者の一人としての言及であって、揚雄を特別に重んじる姿勢、道の繼承者として別格にする態度は見られない。やはり韓門に屬する李翺は、「答朱載言書」（『四部叢刊』本『李文公集』卷六）のなかで經書以後の「自ら一家の文を成し、學者の師歸する所」である表現者を列擧し、そこには韓愈が重視した孟軻、荀況、揚雄が含まれてはいるが、しかしそれは老子以下を列擧して漢代では「賈誼・枚乘・司馬遷・相如・劉向・揚雄」と竝べたなかに置かれているに過ぎず、孟子―荀子―揚雄という系譜は浮かび上がってこないし、ことさらに揚雄を重視してもいない。その書翰ではまた、内容と表現の雙方を兼ね備えなければならないとする觀點から、表現が目立つだけで教化の役割を果たさない作品として揚雄の「劇秦美新」を擧げ、逆に道理にかなう内容は盛り込まれても表現の拙いものの一つとして王通の『文中子中說』を擧げている。内容と表現のほどよき配分を得ない點によって、揚雄も王通も否定されるのである。

韓愈の記した道統を改めて語り直し、さらにそこに韓愈を加えたのは、晩唐の皮日休（八三四？―八八三？）である。「請韓文公配饗太學書」（『皮氏文藪』卷九）[8]では孔子の道を繼承した者として孟子・荀卿を擧げ、それを嗣いで文中子を擧げ、そののちに韓愈を擧げる。王通の重視は何寄澎氏[9]によれば、皮日休以前にはなく、そののち柳開の稱揚を經て宋代に廣まっていく。文中子王通に對する評價は、王通が孔子の『論語』に倣った『中說』という書物を持ち、さらに「王氏六經」（『續詩』・『續書』・『元經』・『禮論』・『樂論』・『贊易』、いずれも逸）と

總稱される、六經に對應する著述をしたことによる。韓愈による揚雄の重視も揚雄が經書に擬する書物を著わしたことによるのだが、しかし皮日休は孔子→孟子・荀子→王通→韓愈という系譜を明示しながら、揚雄は入れていない。それはおそらく揚雄が王莽政權に與したことを皮日休が批判するからである。「法言後序」（同卷五）のなかで『法言』の「周公以來、未だ漢公（王莽）の懿有らざるなり」という言葉を引いて、揚雄の王莽に對する卑屈な態度は「劇秦美新」にあらわれているとし、「雄の道は茲こにおいて疵なり」と記している。

韓愈の提示した道統が韓愈をそこに含めて再び取り上げられるのは、韓愈を繼承すると稱する以後の古文家まで待たねばならない。皮日休は揚雄を否定していたのに、韓愈の繼承者たちの間では揚雄は韓愈が唱えた以上に明確に道統のなかに組み入れられる。その最も早い例は、韓愈の生前に書を呈して入門を乞うた林簡言[10]なる人物の書翰に見える。「上韓吏部書」（『全唐文』卷七九〇）のなかで、孟軻・揚雄亡き今、聖人の道を傳えているのは閣下しかいないと師事を願っている書翰だが、そこには孔子の繼承者として孟軻→揚雄→韓愈という系譜がふまえられている。林簡言のこの觀點は韓愈の文を受けてのことに違いないが、韓愈自身はこれほど單純な系譜を記していたわけではなかった。揚雄を系譜に繰り込みながらも、孟軻とまったく同等に扱っているものではなかったが、繼承者はこのように單純化して祖述していくのである。

晩唐の孫樵は繰り返し自分が韓愈を繼承することを記している。「嘗て文を爲るの道を來公無擇に得たり。來公無擇は之を皇甫公持正に得たり。皇甫持正は之を韓先生退之に得たり」（「與友人論文書」、『四部叢刊』本『孫樵集』卷二）。「樵は嘗て文を爲る眞訣を來無擇に得たり。來無擇は之を皇甫持正に得たり。皇甫持正は之を韓吏部退之に得たり」（「與王霖秀才書」、卷二）。韓愈→皇甫湜→來無擇→孫樵、古文の傳承をこうした系譜のなかで捉え、自分をその最後に位置づける考え方そのものが、韓愈の道統觀から生まれているのである。ちなみにこの系譜はのちに蘇軾によってしだいに衰微に向かうものとして記されている。「蓋し唐の古文は、韓愈より始まる。其の後　韓を學びて至らざる者、皇甫湜爲り。皇甫湜を學びて至らざる者、孫樵爲り。樵より以降は、觀るに足る無し」（「謝歐陽內翰書」、孔凡禮點校『蘇軾文集』卷四九）[11]。

みずからを韓愈の古文の繼承者として位置づける孫樵が、揚雄を高く評價していることは折りに觸れて見える。「古今の所謂ゆる文なる者は、辭必ず高くして然る後に奇と爲す。意必ず深くして然る後に工と爲す。……秦漢以降、古人の工にして奇と稱する所の者は、揚・馬に若くは莫し」（「與友人論文書」、同卷二）。「揚・馬」は漢賦の代表的作者として揚雄・司馬相如を指すのがふつうだが、ここでは揚雄・司馬遷を指しているだろう。「與高錫望書」（同卷二）では史書執筆の難しさを述べて、韓愈の『順宗實錄』も班固には及ばない、まして「子長・子雲」には及ばないと述べて、司馬遷・揚雄を高く揭げる。「與賈希逸書」（同卷二）では表現者は常に不遇であったことを述べて、孔子・孟子・子思・司馬遷・班固・揚雄、そして唐代の元結・陳子昂・王勃・盧仝・杜甫・李白・王昌齡の名を列擧するが、そこにも器を滌った司馬相如の名はない。孫樵は今のこる文のなかで司馬相如を一度も擧げていないのである。黃巢の亂で蜀に逃れた僖宗が孫樵を職方郎中に取り立た詔（孫樵「自序」）に、「行に三絶有り」の一つとして孫樵を「揚・馬の文有り」と稱したのも、揚雄・司馬遷になぞらえたものであろう。孫樵はみずから韓愈の文統を繼ぐと稱するように、揚

雄の重視も引き繼いでいるのである。

4　宋代の古文家

宋代の古文家として最初に名乗りを擧げている柳開（九四八―一〇〇一）は、孔子―孟子―揚雄―韓愈に己れが續くことを表明している。たとえば「應責」（『四部叢刊』本『河東先生集』卷一）に言う、「吾れの道は、孔子・孟軻・揚雄・韓愈の道なり、吾れの文は、孔子・孟軻・揚雄・韓愈の文なり」。これは先に見た韓愈の「重答張籍書」の「己れの道は乃ち夫子・孟軻・揚雄の傳うる所の道なり」の系譜に韓愈を加えたものであり、言い方まで韓愈の文章を襲っている。ほかにも「答陳昭華書」、「答臧丙第三書」、「上符興州書」（いずれも卷六）、「上主司李學士書」（同卷七）、「昌黎集後序」（同卷一一）などに繰り返し孟子―揚雄―韓愈という系譜を述べ、さらに「答臧丙第一書」（同卷六）、「東郊野夫傳」、「補亡先生傳」（ともに卷二）などではそこに王通も加えられている。「上大名府王祐學士第三書」（同卷五）では孟軻・揚雄・王通を擧げたあと、韓愈はその下位に位置するものと述べたり、或いは「知邠州上陳情表」（同卷一〇）では「揚雄・孟軻の述作を愛す」と二人だけを擧げたりしているように、王通や韓愈は省かれることがあっても、柳開は常に揚雄を孟子と竝べて重視している。その時の揚雄はもちろん賦の作者としてではなく、經書を繼ぐ著述の作者としてのものであった。『孟子』十四篇は、軻の書なり。揚の『太玄』・『法言』は、雄の書なり。王氏の六經は、通の書なり」（「上大名府王祐學士第三書」、同卷五）。

この系譜に王通を加えたのは皮日休の稱揚を受けてのことであろうが、王通を重視した皮日休は揚雄に對してはその王莽政權に加擔した態度を批判していたのだった。しかし柳開は「揚子劇秦美新解」（同卷二）のなかで揚雄を辯護している。「揚子の志は、莽を譏りて媚に非ざるなり。『美』と謂うの稱は、『劇』と曰うの類なり」、このような辯明をしなければならなかったことは、すでに揚雄を評價するには「劇秦美新」まで含めて說明しなければならなかったことを示している。また『漢書』揚雄傳に見える、聖人にあらずして經書を作る僭越については、「漢史揚雄傳論」（同卷三）をもって辯じている。「能く聖人の辭を言い、能く聖人の道を明らかにし」たのであるから、「是れ子雲は聖人なり」という論を展開するのである。

柳開以後の古文を唱えた人々もこぞってこの系譜を力說している。孫復（九九二―一〇五七）は「夫子の道」を傳えた者として「孟軻氏・荀卿氏・揚雄氏・王通氏・韓愈氏」の名を擧げ（「上孔給事書」、『全宋文』卷四〇一）、漢から唐までの間、「仁義に終始」した者は「董仲舒・揚雄・王通・韓愈のみ」と言う（「答張洞書」、同卷）。孫復にはまた『太玄』は『易』になぞらえて作ったものではなく、揚雄の本意は王莽を否定することにあったと論じる「辨揚子」（同卷）という作もある。これは揚雄が王莽に加擔したこと、經書を作る越權を犯したこと、その二つの汚點を一氣に解消させようとするものである。

さらに石介（一〇〇五―一〇四五）には揚雄を組み入れた道統についての言及が數多くある。「天は之を孟軻・荀卿・揚雄・王通・韓愈に受け、孔子の道　復す」（「上張兵部書」、『徂徠石先生文集』卷一二）[12]。ほかにも「上趙先生書」、「上范思遠書」、「上孫少傅書」、「答歐陽永叔書」、「與祖擇之書」、「與君貺學士書」、「怪說・中」、「尊韓」、「泰山書院記」などのなかで、たびたび孟子・揚雄・王通・韓愈という系譜を記している。

宋初の古文家が孔子の道の傳承者として孟子―揚雄―王通―韓愈という系譜を記すことにこのように熱心であるのは、彼ら自身を孔子以來の道の繼承者として權威付けようとしたからにほかならない。當時、古文はまだごくわずかな者が提唱していたものに過ぎなかった。韓愈と柳宗元の文集を世に出したことで知られる穆修（九七九―一〇三二）が、「其の間に獨り敢えて古文を以て語る者は、則ち怪を語る者と同じなり。衆又た之を排詬し、之を罪毀し、目して以て迂と爲さざれば、則ち指して以て惑と爲す」（「答喬適書」、『四部叢刊』本『河南穆公集』卷二）と記しているようなありさまだったのである。

時代の文學環境がまだ古文を受け入れていなかったのみならず、宋初期に古文を唱えた柳開、穆修、石介らはいずれも進士に及第したものの、長い地方官を餘儀なくされている。不遇の境遇にあってこれから世に出ようと欲しているいわば在野の聲であった。それゆえに自分自身を正統的系譜の末端に据えて、存在を主張しようとしたのであろう。

柳開や孫復は「劇秦美新」を辯護していたが、宋王朝が安定するにつれて二君に仕えた臣に對する彈劾はしだいに熾烈になっていった。五代の馮道は四朝に仕えたが、馮道自身はそれをまったく恥じないどころか、次々と高位に就いた自足の思いを「長樂老自敍」に綴っている。『舊五代史』（宋・太宗・開寶七年、九七四、成書）でも本傳には宰相としての任務を果たしたことが稱えられ、わずかに「論」の部分で四朝に仕えたことは忠といえないと記すが、そのために最上の諡を與えられなかったと言うのみで、強く非難してはいない。それが歐陽修『新五代史』になると、馮道の不忠は貞操を貫いた市井の婦人にも劣るものとして激しく斷罪するに至る（卷五四「馮道傳序」）。さらに司馬光『資治通鑑』では卷二九一、後周・太祖・顯德元年（九五四）の馮道の死の箇所に、まず歐陽修の『新五代史』の非難を節錄したうえで自分の意見も加え、宰相としても無能であった、そういう馮道を取り立てた皇帝にも罪はあると一層嚴しく否定している。五代及び宋初には王朝の中心に位置した人材がそのまま次の王朝でも樞要の地位に就くということがごくふつうに行なわれていたために不忠とみなされることもなかったのが、宋王朝が落ち着くにつれて、二君に仕えることは嚴しく指彈されるようになるのである。

ところが、馮道に對しては口を極めて糾彈していた司馬光が、揚雄については王莽政權に仕えたことを不忠として捉えることはせず、低い官位に長く沈んだままだったので王莽によって取り立てられたのだと解釋し、揚雄が名利に無頓着だった面を强調して、「今　揚子の書は文義至って深く、論は聖人に詭かず、則ち必ず諸子を度越せん」と高く稱揚している（『資治通鑑』卷三八、王莽天鳳五年）。司馬光は諸家の說を集めて『太玄集注』を著わすなど、一貫して揚雄を評價している。「劇秦美新」への辯明は揚雄を不忠とする契機を含むものではあっても、まだ實際に揚雄をとがめる論は生まれていないのである。

その司馬光が翰林學士に取り立てられようとしたのを固辭した際、神宗は古來、文と學との雙方を身につけた人士は少ない、漢では董仲舒と揚雄だけだ、君は雙方を備えているからと說得している（『宋史』卷三三六司馬光傳）が、そこにも揚雄は非難されるべき對象とされていなかったどころか、古えの賢人の典型とみなされていたことがわかる。

揚雄はこのように朝廷においても高い評價を得ていたが、周邊で唱えられていた孔子に連なる道統が中心にまで浸透するに至ったことを示すのは、孟子、荀子、揚雄、韓愈らを伯爵に封じ、孔子廟に祀る詔が發せられたことである。それはまず神宗の熙寧七年（一〇七四）、判

國子監常秩らによって孟軻・揚雄の像を孔子廟に立て、爵號を賜ることが建議されたことに始まるが、その時は見送られた（『宋史』巻一〇五、禮志。『續資治通鑑長編』巻二五八）。それから十年を經た元豐七年（一〇八四）五月の詔によって、孟軻、荀況、揚雄、韓愈の四人を、唐・貞觀二一年に祀られた二十一賢に併せて祀ることになった（『續資治通鑑長編』巻三四五）。これについては元豐七年七月の日付をもつ晁補之の「北京國子監奉詔封孟荀揚韓告先聖文」、「詔封孟荀揚韓告先師文」（ともに『四部叢刊』本『鷄肋集』巻六〇）が記している。孟子―荀子―揚雄―韓愈という系譜は、その四人が詔勅によって孔子廟に祀られることによっていわば公認されたのである。

しかし荀子・揚雄・韓愈と續く道統がこのように天子から保證されるに至ると、却ってそれ以後は强調されなくなるように見える。それ以前から揚雄に對する批判はぽつぽつとあらわれていた。早くは、王禹偁（九五四―一〇〇一）は言論によって「王道」を發揚した者として「孔子・孟軻・荀卿・揚雄」を擧げているものの（「答黃宗旦書」其二、『四部叢刊』本『小畜集』巻一八）、一方では『太玄』を手本として進士を目指す青年に對して、「雄の太玄は既に當時に用いられず、又た後代に行なわれず。……僕謂えらく雄の太玄は乃ち空文のみ、と」（「再答張扶書」、巻一八）と『太玄』を否定している。宋祁（九九八―一〇六一）は韓愈が荀況・揚雄を「大醇にして小疵」と言ったのを言い足りないとして、「荀の學は、疵と雖も、用に切なり。揚は則ち言を立つるは可なるも、用に近からず」（『宋景文筆記』巻上）と、揚雄は荀子より劣るとする。歐陽修（一〇〇七―一〇七二）は道を備えれば文はおのずとついてくるものだと述べるなかで、孟子・荀子が無理に書こうとしなかったのに對して「子雲・仲淹の若きは、方に焉に勉めて言語を摸す。此れ道未だ足らずして强いて言う者なり」と、揚雄・王通を批判する（「答吳充秀才書」、『居士集』巻四七）。蘇洵（一〇〇九―一〇六六）は歐陽修に呈した書翰のなかでおそらく當時すでに十分に浸透していた、孔子―孟子―荀卿子―揚雄―韓愈氏という系譜を記しているが（「上歐陽內翰第二書」、『嘉祐集』巻一二）、揚雄の『太玄』については「心に得ること無くして」書かれたものであり（「太玄論」）、「蓋し雄は奇を好みて深きに務む、故に辭は夸大多く、而して觀るべき者鮮し」（「太玄總例・引」、ともに巻七）と批判する。王安石（一〇二一―一〇八六）も「原性」（『四部叢刊』本『臨川先生文集』巻六八）では「性」の解釋において孟子・荀子・揚雄・韓愈を否定して孔子のみを取る。蘇軾（一〇三七―一一〇一）は「性」の解釋では韓愈よりも揚雄に贊同しているが（「揚雄論」、巻四）、文を論じたなかでは、「揚雄は好んで艱深の辭を爲り、以て淺易の說を文る。若し之を正言すれば、則ち人人之を知る。此れ正に所謂ゆる雕蟲篆刻なる者にして、其の太玄・法言は皆な是の類なり。而るに獨だ賦のみを悔やむは、何ぞや。終身雕蟲して獨だ其の音節を變うるのみにして、便ち之を經と謂うも、可ならんか」（「答謝民師書」、巻四九）、「行雲流水」のような自然な文を標榜し、その對極にある揚雄の文體を否定する。このように揚雄を道統のなかに据えて絶對視する態度はくずれ、何を論じるかによって肯定と否定が交じるようになる。この段階で褒貶が相い半ばすることは、揚雄が顯彰から衰退に向かう過渡期をあらわしているといえようか。揚雄への批判的言辭は理學家の發言を待つまでもなく、上に引いたような宋代の文學を代表する表現者の間から出てきているのである。しかしそこでも揚雄に對する貶辭はその思想や文體に對するものであって、王莽政權に仕えたことに對する非難は見えな

い。それが糾彈の對象となるのは、宋學が嚴格になってからのことである。

四　おわりに

もともと揚雄は容易に捉えがたい、複雑で多面的な存在であった。そのために揚雄に内在する多様な要素が、それぞれの時代、各おのの文學者によってみずからの主張に對應する部分が選び取られ、それぞれの揚雄像が作り上げられていく。漢賦の代表的な作者として、或いはまた埋もれた著述家として、さらには名利を離れた孤高の思索者として、揚雄は形象化されていく。そして韓愈に至って道統の一部に組み込まれ、韓愈に追隨する人々はそれを受けてみずからの正統性を主張する手だてとした。復古を唱える人々にとって揚雄は必要な存在だったのである。孟子・荀子・揚雄・韓愈が孔子廟に祀られるまでに系譜が確立すると、一方ですぐれた表現者たちは揚雄の瑕疵を指摘するようになる。さらに宋學が浸透していくにつれて揚雄が節を汚したことからその地位は低下していく。このように揚雄像はそれぞれの時代、個性がみずからを映し出す鏡のように時代とともに變遷していくのであり、揚雄の受容のありさまを通してそれぞれの時代の要求を見ることができよう。

注

(1)『盧照鄰集箋注』(祝尙書箋注、上海古籍出版社、一九九四)
(2)『楊炯集』(徐明霞點校『盧照鄰集・楊炯集』、中華書局、一九八〇)
(3)『王子安集注』(蔣清翊註、上海古籍出版社、一九九五)
(4)『駱臨海集箋注』(陳熙晉箋注、上海古籍出版社、一九八五)
(5)『李白全集校注彙釋集評』(詹鍈主編、百花文藝出版社、一九九六)。これは宋蜀本を底本とするが、王琦注本などでは「古風五十九首」其八。
(6)『韓昌黎文集校注』(馬其昶校注・馬茂元整理、上海古籍出版社、一九八六)
(7)『柳宗元集』(中華書局、一九七九)
(8)『皮氏文藪』(上海古籍出版社、一九七九)
(9)何寄澎「唐宋古文運動中的文統觀」(『唐宋古文新探』、大安出版社、一九九〇)
(10)林簡言は『登科記考』に大和四年(八三〇)、大中四年(八五〇)の二箇所に進士及第が記される。いずれも韓愈の沒後(八二四)のことであるが、大中四年では遲すぎるか。
(11)『蘇軾文集』(孔凡禮點校、中華書局、一九八六)
(12)『徂徠石先生文集』(陳植鍔點校、中華書局、一九八四)
(13)『嘉祐集箋注』(曾棗莊・金成禮箋註、上海古籍出版社、一九九三)